

## ***M-GTA 研究会 News letter no.35***

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：[grounded@ml.rikkyo.ac.jp](mailto:grounded@ml.rikkyo.ac.jp)

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、塚原節子、  
林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司

### <目次>

◇自著を語る

◇近況報告：私の研究

◇連載・コラム：『死のアウェアネス理論』を読む（第9回）山崎浩司

◇第48回研究会のご案内

◇編集後記

### ◇ 自著を語る

『健康マイノリティの発見』

（グラウンデッド・セオリー・アプローチシリーズ）

標 美奈子著 弘文堂 2008年10月

標 美奈子

ヒューマンサービスにかかわる人は誰もが、様々な困難をかかえた人たちの生活や解決のしようがない重い出来事に遭遇します。私自身も、保健師として多くの人たちに出会ってきました。その中で特に気にかかっていたのは、健康や生活へのケアを必要とする状況にありながら、自ら声を上げることができない状態におかれ、その問題が顕在化しにくい人たち、あるいは保健・医療・福祉の狭間におかれケアの対象として意識されない人たちの存在でした。その経験世界は社会からさまざまな影響を受けながら、体験した人のみが知れる世界があり、意図的に関心を向けないと埋もれてしまう事柄でもあります。本書を通して「健康マイノリティ」とも言うべき人たちの世界を理解したいと思ったのです。

本書は、認知症者の介護、自閉症者の養育を経験した人たちを対象に、長年にわたる生活体験を M-GTA による調査結果から明らかにし、その上で健康支援に関わる保健師の役割を問うものです。今回対象とした人たちにはいくつか共通点があります。ひとつは時代的

背景で、病気や障害に対する診断・治療が十分確立されていないこと、社会的支援や理解が得られない時代に介護・養育を経験していることです。二つ目は意思の疎通の図りにくさや予測できない行動があること、三つ目は介護・養育期間の長さ、四つ目は個人差が大きいため一般論では対応できないことが多く、家族が体験的に積み重ねてきた対応方法を見出してきた、という点です。同じような背景を持つこの両者には、病気や障害という枠を超えた経験世界の共通した何かがあるのではないかとということも関心事でした。

認知症者の介護者の調査の結果では、介護体験プロセスとして、始まりのころ認知症そのものが理解できず「正常視反応とその拡大」という不安と戸惑いに揺れながら、目の前に起こる出来事に対応し、第3者の介入を契機に「納得への切り替え」という転換の時期を経て、大変だけれど何とか対処方法を工夫していく「介護体勢のルーティン化」というプロセスがありました。当時、認知症に対する情報や相談する場がほとんどなかったことが、介護者の戸惑いの期間を長引かせ、介護体勢を整えていくのに介護者自身の試行錯誤の努力を要していました。介護によって心身のストレスを受け、予定していた人生の変更を余儀なくされた介護者は、介護と平行して「並行的自己確認」「断念と埋め合わせ」のように自身の存在価値を取り戻し、長期にわたる介護の意味づけをして折り合いをつけていったのです。

自閉症者の母親の場合は、特徴的な言動の理解しにくさ、予測のつきにくさから母親自身が「子どもへの埋没」を余儀なくされ、わが子でありながらとらえどころがなく「未知の子との葛藤」をしているように感じ、「安定への希求」への思いを強めていきます。これらは繰り返し適応され、その結果自分でなければだめだという母親の「絶対的存在意識の形成」が強化されていきました。この「絶対的存在意識の形成」は、一人で負うには重過ぎる子どもへの対応を可能にする唯一の原動力になっていたのではないかと思います。

この両者に共通していたことは、介護者・母親が「抱え込む」という対処を行うことで生活を成り立たせていること、長期間の介護・養育により介護者・母親の個人の存在が見えなくなっていくこと、健康問題が生じてくること、経験の積み重ねにより素人の専門性ともいふべき力を備えていくことなどでした。共通性については、もう少し深めていきたいと考え、今後の課題としたいと思っています。

本書を書き進めながら、保健師は「健康マイノリティ」を発見していく役割があると再確認しました。日常業務を通し出会うチャンスがあること、問題を提起し施策に反映していくことが出来る立場にあるからです。この研究結果を、保健師の学習会の素材として使ってくださいるところがあると聞きました。地域には、同じような状況におかれている人たちがたくさんいるはずです。新たな発見をしてくださることを願っています。

この研究会で構想発表や研究報告をさせていただき、皆さんからご意見を伺う機会がなければ、気持ちばかりが先走っていた私の研究は一步も前に進まなかったと思いますし、本を書くという経験もなかったと思います。改めて皆様に感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。次のモノグラフの誕生を心待ちにしたいと思います。

## ◇近況報告:私の研究

小池磨美 ((独) 高齢・障害者雇用支援機構)

障害者の就労支援の現場に長く勤務し、研究方法についての学習や訓練の経験もないままに始まった研究職も4年目が終わろうとしています。

研究職になって間もないころには、「自分に何ができるのか、何が求められているのか」がわからない迷路にはまっていました。研究職2年目を迎えた初夏に、木下先生のM-GTAの講義を聴く機会を得、その時には、講義の内容は10分の1も理解できていなかったと思うのですが、「唯一の『財産』である、就労支援の現場での実践が活かせるかもしれない方法に出会えた。」と感じました。

それから、『財産』を活かせる研究テーマを探し、文献に当たり、研究職3年目に、「精神障害者に対する就労支援過程における当事者のニーズと行動の変化に応じた支援技術の開発に関する研究」と名付けた研究が始まりました。データを収集し、共同研究者とともに、分析を始めましたが、大きな研究テーマから分析テーマが絞り込まれるまでに、結果図を2回作り直すことになり、定まった分析テーマに基づき、分析焦点者の視点で動きと変化を捉え、新たな概念の生成や概念・カテゴリー間の新たな動きや意味に気づくたびにそれまでに生成した概念やカテゴリーの関係性や動きを見直し、ワークシートに反映する作業を続け、最終的な結果図とストーリーラインにたどりつくまでには1年9カ月という時間が必要でした。そんな中での喜びは、分析作業によって生まれた新たな視点や気づきによって、あやふやだった動きや変化が、くっきりとした輪郭線をとまって立ち現れる瞬間でした。

昨年5月の研究会では研究報告をさせていただき、木下先生をはじめとして、山崎先生、参加者の皆さんから貴重なご意見をいただいたことは、その後の検討や分析の支えとなりました。お陰様で研究も終盤を迎え、年度末には報告書とハンドブックが出来上がります。

この場をお借りして、皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

.....

竹下浩 (ベネッセコーポレーション)

研究会の皆様、いつも有難うございます。

昨年10月の研究会では「中国進出プロジェクトにおける外部専門家の支援プロセス」について貴重なご指導を頂き、有難うございました。先日査読結果メールが届きました。同じ日に佐川先生からニューズレターの件でメールを頂いており、M-GTA研究会とのご縁を改めて感じました。以下、低レベルでお恥ずかしいのですが、少しでもご参考になればと思い、勉強になった点を幾つか共有させていただきます。

まず「概念図が判り難い」。これは、佐川先生の迅速かつ詳細なご指導により、なんとか修正できました。縦軸の意味が不明だったり、本文と概念図で表記にズレがあったり、反省しております。

次は、「仮説が無い」。このコメントを読んだ瞬間、「定量的検証じゃないのに…」とか「実践現場に役立つモデルだし…」など思わず反発(?)してしまったのですが、読み返してみますと、確かに初稿は私の力不足で記述レベルにとどまっていた。前述のご指導に即して概念図の矢印を吟味、考察を追加しました。

そして、「フォーマル理論を提示すべき」です。これも、最初の瞬間は、経済学や統計学のような「数式」や「抽象的モデル」を要求されたと思い、途方に暮れたのですが、木下先生のテキストを熟読したところ、ちゃんと載っていたので感動しました。研究会に参加させて頂いて本当に良かったです。

…こんな感じで、通知受領から現在まで、あの「懐かしい感じ」（一日中頭の中で考えている状態）が復活しています。査読者はお二人とも M-GTA を良くご存じで、経営学でも注目されているなあと思いました。上記の通り、厳しいながらもとても親身なご指導（英語表現まで助言頂きました）であり、査読は自分の勉強不足と研究会の有難さを思い知る良い機会でした。それでは、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

#### ◇ 連載:コラム

### 『死のウェアネス理論』を読む（第9回）

山崎浩司<sup>ひろし</sup>（東京大学）

#### 1. はじめに

今回のコラムは、お詫びと訂正から始めねばならない。それは、前回のコラム（第8回）で、不正確な主張をしてしまったことについてである。具体的にいうと、「グレイザーとストラウスでは、より GTA における図式化にこだわったのはグレイザーだと考えられる」（Newsletter no. 34 : 4 頁）で始まる主張である。これは恐らく正しくない。なぜこれが正しくなさそうなのかは後述するが、いずれにしても、先行研究を十分に吟味せずに見解を提示したことは、研究者としてあるまじき行ないであった。まずは深くお詫び申し上げる。

以下、初めにとにかくこの点について、前言撤回となる議論をしたい。この議論は、グレイザーとストラウスの認識論的立場やグラウンデッド・セオリー・アプローチの位置づけ方の違いに注目するため、紙幅を要するかもしれない。もし、前回コラムの予告に反し、〈疑念認識文脈〉、〈相互虚偽認識文脈〉、〈オープン認識文脈〉それぞれについて、M-GTA 的なストーリーラインの生成を試みるに至らない場合は、どうかお許しいただきたい。

#### 2. コード化パラダイムをめぐるグレイザーとストラウスの対立<sup>1</sup>

グレイザーとストラウスでは、どちらがより図式化にこだわったのか——前言を撤回し

てまず結論をいえば、両者とも理論生成の助けになるという範囲内で、図式化を有効と見ていた。そこに、どちらの方がどれだけ、といった違いは読みとりにくい。

ただ、オープン・コード化によって生成した諸概念を、どのように関係づけて理論を築いていくのかという点で、グレイザーとストラウス<sup>2</sup>とでは違いが見られる。この違いは、ストラウスとコービンが『質的研究の基礎』を出版し、それに対する激的な批判を *Basics of Grounded Theory Analysis: Emergence vs. Forcing* にグレイザーが書いて出版し、決定的となった。木下先生によれば、グレイザーの批判のポイントは次のとおりである——

グレイザーの主張は、グラウンデッド・セオリーの特徴はデータに密着した分析から概念やカテゴリーが「**emergent**（一定の論理的必然性をもって浮上）」してくるのに対して、ストラウス・コービン版はあらかじめ設定した解釈枠組にデータを無理に合わせようとするものであり（「**forcing**」）、しかもそれをグラウンデッド・セオリー・アプローチであると誤って伝えている、というものであった（木下 2003: 40-41）。

ここでグレイザーが批判している、ストラウスらが「あらかじめ設定した解釈枠組」とは、『質的研究の基礎』第9章（軸足コード化）で登場する「パラダイム（以下、コード化パラダイム<sup>3</sup>）」のことである。それは「条件」、「行為／相互行為」、「帰結」という3つの基本的な構成要素から成り、「日常生活で物事を描写するときに言葉を用いる際の論理に従っている（例を挙げると、「その理由で」、「起こったこと」、「私の反応は」、「これがその結果です」）」と説明されている（ストラウス・コービン 2004: 160）。

このコード化パラダイムは、実は『死のアウェアネス理論』にも明確に見てとれる。前回のコラムで注目した〈閉鎖認識文脈〉を思い出してほしい。まず、患者が終末期であるという情報を隠蔽するための構造的条件が示される。これはまさにコード化パラダイムの「条件」に当たる。次に、この条件に基づいて、医療者が患者にフィクションとしての将来の見通しを提供し、患者が「自分は末期かもしれない」という異なる状況評価をしないように多様な評価管理戦術を使うことが、詳しく説明される。この部分は「行為／相互行為」に該当する。そしてその「帰結」こそが、死にゆく患者が自分の終末期状況を医療者から知らされない状況である〈閉鎖認識文脈〉の成立である。

こうしたコード化パラダイムとの符合は、『死にゆくことの認識文脈』を構成するほかのカテゴリー（〈疑念認識文脈〉、〈相互虚偽認識文脈〉、〈オープン認識文脈〉）のうちにも見られ、それが『死のアウェアネス理論』の第3章から第6章の構成（目次）にも明らかに反映されている。たとえば、〈疑念認識文脈〉を記述説明している第4章は、次のような節立てになっている（便宜的に番号をふった）——

- ① 「疑念」認識文脈を構成する条件
- ② 決めてとなる情報をめぐる「かけひき」
- ③ 患者による情報入手とその戦術

- ④ スタッフ：戦術と対抗戦術
- ⑤ 相互作用の特性
- ⑥ 他の認識文脈への変化
- ⑦ 「疑念」認識のもたらすもの

お気づきかと思うが、おおまかに、①が条件、②～⑤が行為／相互行為、そして⑥と⑦が帰結に該当する。すでに見た第3章だけでなく、第5章（「相互虚偽」の儀礼ドラマ）と第6章（「オープン」認識のあいまいさ）の構成にも、おおよそこうした対応関係が見られる。この構成は、少なくとも本書のもととなった研究に関して、比較的限定された状況における人と人との社会的相互行為（作用）に照準し、シンボリック相互作用論的な人間観に基づく分析をするという合意が、どこまで意識的であったかは不明にしる、グレイザーとストラウスの間にあったことを示唆している。

この研究経験をもとにして彼らが体系化した GTA においても、社会的相互行為論的なスタンスを主たるものとするという合意が、『データ対話型理論の発見』を執筆した時点で 2 人の間にあったかどうかは、今後もっと詳細な検討をしてみなければわからない。しかし、グレイザーが *Theoretical Sensitivity* を出版した時点では、そうしたコンセンサスはなかった（なくなっていた？）といえそうである。というのも、すでに前回のコラムで確認したように、グレイザーは 18 種類もの「コード化体系<sup>4</sup> (coding families)」を提示していて、それらは決して、社会的相互行為論的なスタンスに集約できるものではないからである。

このことから、グレイザーが『質的研究の基礎』で提示された軸足コード化の手続きを「強制的 (forcing)」だと痛烈に批判したのは、ストラウスとコービンがコード化パラダイムのみを、オープン・コード化により生成した諸概念を関係づける枠組みとして提示したととらえたため、といえるだろう。グレイザーにとって GTA は、特定の認識論的立場に限定されない、もっと汎用性の高い方法論なのだ。そして、生成された諸概念の関係づけは、主に社会学領域の多種多様な理論・モデル・概念をもとにした、18 種類ものコード化体系を活用することで、自然に浮上 (emerge) してくると彼は考えている。

しかし、木下先生も指摘しておられるように、これまで見てきたグレイザーの批判は、感情的すぎて冷静さを欠いていると言わざるを得ない（木下 1999: 64-66）。というのも、ストラウスとコービンが、決してコード化パラダイムを絶対視していないのは、以下の記述からも明白だからである――

パラダイムは、分析者がそのような関係〔＝概念間関係〕を考える際に用いることができる 1 つの方法である。この点でパラダイムは有用なものではあるが、パラダイムを柔軟性なく用いてもらいたくない。そうでないと、パラダイムは手段ではなく、目的になってしまうからである。（ストラウス・コービン 2006: 178、強調は引用者）

### 3. グレイザーのコード化体系と GTA の位置づけ

上述のように、18 種類に及ぶグレイザーのコード化体系は、社会的相互行為論的なスタンスには集約できない広がりをもっている。では、具体的にどのような特徴をもっているのだろうか。詳しい考察は稿を改めたいが、ここでは 18 種類のコード化体系の名称を概観することで、少なくともそのおぼろげな全貌をつかみたいと思う。

前回のコラムで紹介した「6 つの C<sup>5</sup>」(①)を筆頭に、②プロセス、③程度体系、④次元体系、⑤タイプ体系、⑥戦術体系、⑦相互行為体系、⑧アイデンティティー自己体系、⑨カッピングポイント体系、⑩手段-目的体系、⑪文化体系、⑫合意体系、⑬主流社会学体系、⑭理論体系、⑮秩序化/精緻化体系、⑯単位体系、⑰読解体系と続き、これも前回紹介した「モデル化」(⑩)で終わっている (Glaser 1978: 74-82)。グレイザーによれば、これらは「相互排他的でなく、かなり重複する」うえ、「1 つの体系が他の体系を生じさせる」こともあり、「互いの関係における概念レベルは恣意的である」ため、柔軟な活用が望まれる (Glaser 1978: 73)。

いずれにしても、これらのコード化体系は、「どの時点で何を書くべきか、また実際どのタイミングでスタンスを決め、ある実証的パターンを理論として生成するのかについて、分析者を敏感にする」とグレイザーは主張する (Glaser 1978: 74)。しかし、かなり社会的・認識論的な概念などがそこここに散見していて、しかも独立していない 18 個もの体系は、理解するだけでも相当な社会的ないし人文学的な訓練がなければ難しく、他分野の者や初学者には実質的に活用不可能である (Kelle 2005: [20])。

しかし、グレイザーがこうした複雑なコード化体系を生み出した意図は理解できる。前述のように、彼にとって GTA は、特定の認識論的スタンスに限定されるものであってはならないので、できる限りの多様性をもったコード化の枠組みを用意する必要があったのだろう。別の言い方をすれば、「質的研究を上位概念としグラウンデッド・セオリーをそのひとつとみるのか、それとも質的研究とグラウンデッド・セオリーを等值的関係に置こうとするのか」という疑問に対して (木下 1999: 68)、グレイザーなら「等値」あるいは「GTA の方が上位」と答えるのではないだろうか。

少なくともグレイザーは、GTA が質的研究に限定されない方法論であると考えているのは明白である。その萌芽はすでに『データ対話型理論の発見』第 8 章「量的データのエロポレイション」(グレイザー・ストラウス 1996: 266-299)に見てとれるし、昨年 *Doing Quantitative Grounded Theory* (『量的グラウンデッド・セオリーの実践』: Glaser 2008) という著書が出版されたことから窺える。しかし、それにしてもグレイザー版 GTA は、実証主義から解釈主義を超え、果てはポストモダンの過激相対主義に至るまで、あらゆる認識論的スタンスに基づいた帰納的分析をカバーしようというのだろうか……。もしそうならば、木下先生が言われるように、やはりグレイザーは「終わりのない作業に入ったのかもしれない」(木下 1999: 66)。

#### 4. 展望

今回は、グレイザーとストラウスの GTA に関する位置づけの違いを論じているうちに、結局紙面が尽きてしまった。前回の予告を守れず申し訳ありません。しかし、GTA を活用して研究をしようとする者にとって、その特性理解につながる議論は無駄ではないだろう。したがって、いまだ不十分なものとはいえ、今回の考察から、読者の皆さんが GTA の理解を深める材料をひとつでも見つけてくださったのなら、誠に幸いである。次回のコラムでは、『死のアウェアネス理論』の具体的考察に戻り、前回予告したように、〈疑念認識文脈〉、〈相互虚偽認識文脈〉、〈オープン認識文脈〉それぞれについて、M-GTA 的なストーリーラインの生成を試みたい。

ただ、今回のような GTA の認識論にかかわる議論は、今後もより精緻なものにしていきたいと私は考えている。認識論に依拠しない方法論はないわけで、この認識論的部分が曖昧だったため、オリジナル版 GTA がストラウス・コービン版やグレイザー版に対立的発展を遂げただけでなく、その分裂を踏まえた深い考察から、日本では木下先生により M-GTA が考案され、昨今は社会構成主義的な GTA（シャーマズ 2008）が提示されるに至っている。こうした動向を踏まえた議論は、自分の研究において、【研究する人間】としての自身の関心や認識論的スタンスを明確化して定めていくのに、役立つはずである。また紙面をあらためて取り組んでいきたいと思う。

---

<sup>1</sup> 以下の議論は、(Kelle 2005) による説得的な議論によるところが多い。

<sup>2</sup> より厳密には、グレイザー対ストラウスとコービン。

<sup>3</sup> これはコード化のためのパラダイム（理論的枠組ないし範例）なので、以下「コード化パラダイム」とする。ちなみに、(木下 2003: 41) では、「コーディング・パラダイム」と訳されている。

<sup>4</sup> (木下 2003: 41) では、「コーディング系」と訳されている。

<sup>5</sup> Causes (原因)、Contexts (コンテキスト)、Contingencies (偶発性)、Consequences (帰結)、Covariances (共変性)、Conditions (条件)

#### <引用文献>

シャーマズ, C (2008) 『グラウンデッド・セオリーの構築——社会構成主義からの挑戦』 抱井尚子・末田清子監訳, 京都: ナカニシヤ出版.

Glaser BG (1978) *Theoretical Sensitivity: advances in the methodology of grounded theory*, San Francisco, CA: Sociology Press.

Glaser BG (1992) *Basics of Grounded Theory Analysis: emergence vs. forcing*, San Francisco, CA: Sociology Press.

Glaser BG (2008) *Doing Quantitative Grounded Theory*, San Francisco, CA: Sociology Press.

グレイザー, B・ストラウス, A (1988) 『死のアウェアネス理論と看護——死の認識と終末



- 
- 期ケア』木下康仁訳，東京：医学書院。
- グレイザー，B・ストラウス，A（1996）『データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか』後藤隆・大出春江・水野節夫訳，東京：新曜社。
- Kelle, U (2005) "Emergence" vs. "Forcing" of Empirical Data? A Crucial Problem of "Grounded Theory" Reconsidered. *Forum Qualitative Sozialforschung / Forum: Qualitative Social Research*, 6(2). Retrieved 2009-02-02, from <http://www.qualitative-research.net/index.php/fqs/article/view/467>
- 木下康仁（1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生』東京：弘文堂。
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』東京：弘文堂。
- ストラウス，A・コービン，J（2004）『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』第2版，操華子・森岡崇訳，東京：医学書院。

#### ◇第48回研究会のご案内

【日時】 3月7日（土）13：00～18：00

【場所】 立教大学 8号館2階 8202教室

##### 研究発表1.

王飛 （上智大学大学院総合人間科学研究科心理学専攻）

「在日中国私費留学生のメンタルヘルス変化傾向と関連要因 —2年間のインタビュー追跡調査を通して—」

##### 研究発表2.

大石あき子 （東京福祉大学大学院）

「介護老人保健施設における在宅復帰のプロセスに関する研究」

##### 研究発表3.

浅野正嗣 （金城学院大学）

「スーパーバイザーの事例理解の深化のプロセス」

---

## 構想発表 1.

山元公美子 (山口大学大学院医学系研究科 保健学系学域博士課程前期 1 年)

「妊娠時に未婚であった若年女性が妊娠を継続していく上で経験する思考プロセス (仮)」

参加登録のURL

<https://ssl.formman.com/form/pc/m6FpuDkRPcsg2eUs/>

\* 参加される方は必ず上記にアクセスしてお申し込みください。見学参加の方についても同様です。

## ◇編集後記

- ・ 沈丁花がかぐわしく香る今日この頃ですが、この沈丁花が咲き誇る近所の神社は鬱蒼とした杉木立に囲まれていて、いつも花粉症と沈丁花の香で春の訪れを知らされます。
- ・ HP 開設からほぼひと月、もう 900 名近くの方に訪れていただきました。最近はこの HP をみて研究会参加を申し込まれる方も増えてきました。HP 効果によって、さまざまな分野の方に参加していただけるとうれしいと思います。なお、会員専用ページには、会員のみなさまの掲載論文を PDF 化して載せています。その年度に掲載されたものについては、従来は ML でお送りしていましたが、今年度からはここに載せています。また、会員の方で論文掲載ご希望の方は、お知らせください。
- ・ 研究会の参加申し込みについても、新しく「ふぉーむまん」を用いて画面から必要事項を入力していただいて申し込む仕組みになっています。これで申し込まれると参加者をエクセルで一覧の形にすることもできますし、出席者数も簡単に把握でき、非常に便利です。必要なレジュメ数を用意する都合もありますので、みなさま必ず、(見学者を紹介されるときも含めて) この画面より参加登録してください。会員数も増え、事務量も増えていますため、どうぞご協力よろしくお願いします。
- ・ さて、研究会も今週末ですね。みなさまと積極的な意見交換ができることを期待しています。  
(佐川記)